序　　文

本年も、『海事交通研究』第 73 集をここにお届けいたします。
執筆ならびに査読をいただいた先生方にお礼を申し上げます。

今号では、前号、前々号でも採り上げられた「自動運航船」関連の冒頭の 2 本の論文、「船級協会」関連の論文、太平洋戦争期の日本の海運政策についての論文、さらには、災害時のみならず武力紛争時の運用も考慮に入れた「病院船」に関する論文があり、非常に多岐に亘る内容となっていると思います。

このうち、太平洋戦争期の日本の海運政策についての論文では、当財団創設者の山縣勝見が、戦時中に「海運自治連盟」を結成した村田省蔵氏の下で、海運統制の実務に携わっていた当時に執筆したいくつかの論考や大著『戦時海運統制論』（1944 年）が脚注に引用されています。当時、戦争の遂行に当たり、民間船舶の国家管理、陸海軍への徴用が進み、山縣らは海運統制の下で、船舶の運航管理を如何に効率的に行っていくか、その手順作りと運用に腐心していたことが伺われます。こうして実行に移されていった海運統制でしたが、陸海軍首脳の関心は最前線の戦闘、海軍にあっては日露戦争以来伝統としてきた「大艦巨砲主義」の艦隊決戦を作戦の中心にし、戦場に至る物資の海上補給を担った民間船舶からなる輸送船団の護衛にはほとんど目を向けていなかったので、戦争の進展に伴い、多くの民間船舶と船員が戦争の犠牲になり、船舶の補給もままならず、戦争の帰趨に致命的な影響を及ぼしました。

今号の最後には、2021 年『暁の宇品―陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』を執筆した堀川恵子氏による特別寄稿を掲載しました。広島市宇品にあった陸軍船舶輸送司令部を描いた本作は、船舶の重要性についてあますことなく伝えた力作であり、戦後 80 年に当たる 2025 年の年明けを間近に控え、是非多くの皆様にこうした「歴史」を「過ぎ去ったこと」として終わらせることなく、今後とも記憶に留めて頂きたい、と切望します。

世界に目を転ずれば、2022 年 2 月に開始されたロシアのウクライナ侵攻や、2023 年 10 月に勃発したパレスチナ・イスラエル間の戦争の先行きも不透明であり、世界の国家間、或いは同じ国家内でも、分断が深まりゆく気配が感じられます。これまで世界の潮流であった「グローバリズム」や「ダイバーシティ」、或いは環境重視の動きに対しても、それらを再考する動きも見受けられ、もどかしさが感じられます。

海運の世界もこれらの世界の動きから少なからず影響を受けざるを得ず、現に、武装組織による商船への攻撃が増加している紅海の航行を回避し、喜望峰迂回が常態化しているなど、さまざまな影響が生じています。世界中の人々にとって不可欠な自由な通商の流れ、航海の安全を確保するためにも、早期の平和の実現が望まれます。

また、この欄でも何度か言及していますが、四方を海に囲まれ、海から多くの恩恵を受け、世界中からの食糧・生活物資・エネルギーの供給を受けている日本人にとって、「海」、「船」そして「海運」の世界は、もっと身近で親しみやすい存在になっても良いはずであり、そのための広報の努力を今後とも続けて行ければと思います。

今後とも、この誌面において、多くの優れた論考が寄せられることを期待し、最後になりましたが、皆様のご健康とますますのご発展とをお祈りして、筆をおきます。

2024 年 12 月

一般財団法人　山縣記念財団
理事長　　郷古　達也